慶應義塾 醫学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　1回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

## 第24回
# 慶應医学賞授賞式・受賞記念講演会開催

令和元年12月19日、第24回慶應医学賞受賞者であるハンス・C・クレバース博士（オランダ・ユトレヒト大学医療センター分子遺伝学教授、ヒューブレヒト研究所主任研究員、プリンセス・マキシマ・小児腫瘍センター主任研究員）、岸本忠三博士（大阪大学免疫学フロンティア研究センター特任教授）を信濃町キャンパスに迎え、慶應医学賞授賞式および受賞記念講演会、記念レセプションが開催された。

慶應義塾ワグネル・ソサイエティー・オーケストラの演奏の中、佐谷秀行教授の司会進行により開会された授賞式は、岡野栄之審査委員長による審査報告と受賞者紹介から始まった。クレバース博士は「Wntシグナルによる幹細胞と臓器形成制御」によって、岸本博士は「IL-6の発見から医学への応用」によって、学内外約80名による厳正な審査を経て選出された。

続いて長谷山彰塾長から、両博士に賞状とメダル、目録が授与された。長谷山塾長は両博士の功績を称え祝福し、この賞の意義について「これを受賞する人の名誉であると同時に、慶應義塾にとっても大変名誉である」と語った。

また、来賓として亀岡偉民文部科学副大臣兼内閣府副大臣、ペーター・ファン・デル・フリート駐日オランダ王国大使より祝辞が述べられた。

続く受賞者からの挨拶でクレバース博士は、尊敬する日本の医学・生命科学の研究者として、山中伸弥先生、大隅良典先生、本庶佑先生といったノーベル賞受賞者の名前を挙げたうえで、日本とオランダの医学研究のつながりに言及。10年ほど前にクレバース博士の研究室に在籍した佐藤俊朗教授（オルガノイド医学講座）についても、多大な貢献をしてくれたと紹介した。

また、世界中から集まっている研究室のメンバーたち、とりわけ長年にわたって支援してくれている奥様に対する感謝の言葉を述べた。

岸本博士は、これまでの慶應医学賞受賞者の中でもご自身が年長者であることに触れ、今回の受賞はいくつになっても研究者として頑張ってほしいという励ましだと受け取ったと話した。さらに、かつて指導者から言われた「人を残す、仕事を残す、財を残すというものの、仕事を残したところで教科書に一行増えるだけだが、人を残せば後世まで受け継いでいくことができる」という言葉に感銘を受けたとして、後進を育てることの重要性について語った。

最後には、自身の研究の成果により多くの患者さんを救うことにつながったことをうれしく思うと話し挨拶を締めくくった。

受賞記念講演会は天谷雅行医学部長による挨拶から始まり、会場は世界の第一線で活躍される両博士の貴重な講演を聴くため集まった300名以上の聴衆で満席となった。各講演後は活発な質疑応答が行われた。

夜には記念レセプションが盛大に行われた。学外審査委員である浅島誠帝京大学戦略的イノベーション研究センター特任教授より祝福の言葉があり、医学部管弦楽団の演奏の中、両教授をはじめ、参加者は大いに歓談した。

【慶應医学賞受賞者2名へのインタビュー記事は令和2年2月号にて掲載】

写真左から、天谷医学部長、竹内常任理事、ファン・デル・フリート駐日オランダ王国大使、岸本博士、クレバース夫人、クレバース博士、長谷山塾長、岡野医学研究科委員長

受賞記念講演での
クレバース博士

受賞記念講演での
岸本博士

慶應義塾大学医学部主催
# 第4回健康医療ベンチャー大賞
## 決勝大会を開催

医学部主催、理工学部・ビジネススクール・慶應義塾大学イノベーション推進本部共催の健康医療ベンチャー大賞が2019年12月8日に日本橋高島屋三井ビルディング（三井不動産ご協賛）にて開催されました。

発足以来応募数は増え続け、学内・学外を含め130チームをこえる登録数を達成（学生・社会人合計）。今年はポスター形式の1次審査を導入し20組が選出、さらに面接形式の2次審査で6組が選ばれ、決勝大会のファイナリストとしてプレゼンテーションを行いました。

社会人部門では汗中乳酸センサーを用いた医療健康サービスを提供する株式会社グレースイメージングが、学生部門ではグラム染色のシステム化を提案するGrandEyeが、200人超の観衆の前で見事優勝しました。その他、企業賞やオーディエンス賞も大いに盛り上がり、決勝大会は成功裏に終わりました。

参加者向けに、知財のビジネス化に関するセミナー、殿町キャンパス共催の医療機器プラン作成ハッカソン、学内専門家とチームのマッチングといった企画を行いました。特に今年初めて行ったポスター形式での1次審査は好評で、アカデミアのビジネスコンテストらしいフィードバックが行き交う場となりました。学内外の関係者の皆様より弛まぬご理解とご支援を賜りこの場を借りて御礼申し上げます。

慶應義塾ではベンチャー創出の機運が年々高まっています。ベンチャー大賞は医学部単独の企画ではなく、大学全体のイノベーション創出の様々な取り組みと有機的に連携していきたいと考えています。ビジネスとサイエンスの高いレベルの両立が可能であることを慶應内外へより広く周知し、慶應義塾の推進する知財産業連携の一助となるよう活動していく所存です。

（実行委員　大岡令奈　産婦96回）

お問い合わせ：contest@keio-antre.com
サイト：https://www.keio-antre.com/

130組以上のチームの中から勝ち抜いた
６組のファイナリストによる決勝大会

聴衆の多さから注目度の高さが伺える

# 秋の叙勲 受章者一覧

**瑞宝中綬章**
**中村　達**（外49回）
〈教育研究功労〉
元　浜松医科大学長

**瑞宝中綬章**
**藤野　忠彦**（内47回）
〈保健衛生功労〉
元　（独）国立病院機構神奈川病院長
第148回日本結核病学会関東支部学会会長
元　慶應義塾大学医学部内科学（血液・感染・リウマチ）客員教授
元　慶應義塾大学医学部内科学（血液・感染・リウマチ）講師（非常勤）

**瑞宝小綬章**
**野村　總一郎**（精53回）
〈防衛教育功労〉
元　防衛医科大学校副校長
六番町メンタルクリニック名誉院長
慶應義塾大学医学部精神・神経科学講師（非常勤）

**瑞宝小綬章（2003年　藍綬褒章）**
**澤　温**（精51回）
〈保健衛生功労〉
元　さわ病院長
さわ病院理事長
元　日本精神科救急学会理事長

## 第98回　慶應医学会シンポジウム
# 「リンパの可視化（イメージング）技術の最前線」

放射線科学教室　陣崎　雅弘（66回）

令和の時代を迎えて最初の慶應医学会シンポジウムが、本年10月26日（土）に「リンパの可視化（イメージング）技術の最前線」と題して、慶應義塾大学病院2号館11階　大会議室にて開催されました。

この20年余りの画像診断の進歩により、循環器系、呼吸器系、胆道系、消化管系、尿路系など多くの人体のシステムが3次元で可視化されてきました。しかし、そのような中で、いまだに十分可視化ができていない領域として残されてきたのが、リンパ系です。従来用いられていた造影X線・核医学・ICGなどの検査は空間分解能が悪く、脳に関しては、リンパの仕組み自体がよくわかっていない状況です。今回は、近年長足の進歩を遂げているリンパ系の可視化と低侵襲治療の現状を取り上げました。講師には、この分野のpioneerとして国際的にも活躍中の先生方をお招きし、前半は躯幹部のリンパの診断・治療に関して、後半は脳のリンパの可視化に関する最先端をお話し頂きました。

前半の最初の演題では、形成外科教室の梶田大樹先生に、光超音波イメージングによるリンパ管の可視化をご紹介頂きました。これは慶應が先導している取り組みで、深さ2㎝までであれば直径0・2㎜のリンパ管を3次元で描出できるとのことです。更にリアルタイムの動画で捉えた世界初のリンパの蠕動は、鮮烈な印象を与えてくれました。これらの画像は、リンパ管一細静脈吻合術（LVA）の手術計画へ有用であることをお話し頂きました。続いて、防衛医科大学放射線医学講座の曽我茂義先生には、MRを用いたリンパ管の可視化をご紹介頂きました。造影剤を用いたMR検査で、下肢全長など広範囲のリンパが3次元で可視化でき、リンパ浮腫の診断やLVA等の治療計画に有効であることが紹介されました。また、造影剤を使わない胸管描出やリンパ節からの造影で胸管を描出する方法なども紹介され、MRIのリンパ管イメージングには更なる発展が期待できそうです。放射線科学教室（診断）の井上政則先生には、新しい治療法であるリンパ漏に対する塞栓術・硬化療法の話題を提供してもらいました。これは、鼠径部のリンパ節を穿刺してリンパ管造影を行うことで漏出部を同定し、漏出部の塞栓術を行う治療法で、彼自身、日本・アジアで広く啓蒙活動を行っています。全身のリンパ漏が対象になるので、多くの診療科の先生に知っておいて欲しいとのことです。後半は、脳のリンパの仕組みである"glymphatic system"に関して、まず基礎の立場から、薬理学教室の安井正人教授にお話し頂きました。脳のリンパ系は最近少しずつ解明されてきており、ご専門にされているアクアポリンが脳のリンパ流の分子メカニズムに関与しており、脳のリンパ排泄と睡眠やアルツハイマー病や筋萎縮性側索硬化症との関連も示唆されるなど大変興味深いお話しをして頂きました。続いて、臨床学的な観点から、名古屋大学大学院医学系研究科総合医学専攻高次医用科学講座量子医学分野の長縄慎二教授には、MRIを用いた脳リンパ流に関する最新の知見をご紹介いただきました。特に内耳の内リンパ水腫の画像化から見えてきた脳内における血管周囲腔に沿った方向の水の移動や認知機能との関連は大変興味深かったです。

今回は、まだ端緒についたばかりの研究領域を取り上げさせて頂きましたが、質疑応答も活発で、多くの参加者に興味を持って頂けたのではないかと思います。このシンポジウムを通じて、リンパ系の最前線を知る事ができただけではなく、この領域の進歩が、今後の新しい医学医療の発展に大きく貢献する可能性を感じることができました。多忙な中で講演を引き受けて下さった講師の先生方や、シンポジウムの企画・運営にご尽力頂いた皆様方に、改めて御礼申し上げます。

会場の様子

司会を務めた安井君と陣崎

# 第5回 医療連携推進フォーラム開催

地域医師会、連携医療機関との「顔の見える医療連携」を目的に開始した医療連携推進フォーラムは、第5回目の開催となりました。今回、当院を退院後の患者さんの生活を支えていただいている、東京都区西部および23区内に所在する訪問診療所、訪問看護ステーション、高齢者相談支援センター、連携病院等の方々をお招きしました。

第一部の講演会では、三村將副病院長からのご挨拶ののち、加藤恵里子医療連携推進部副部長（当院看護部長）より地域連携の取組みの現状報告を行いました。その後、当院の医療チームの取組みを紹介し、地域に連携するまでの院内での活動をご理解いただく場といたしました。救急科診療科副部長の本間康一郎先生からは「慶應ホットライン」をご紹介いただき、続いて新たに開設する「医療・看護・介護相談コールセンター」のご案内をいたしました（11月11日より開設）。

第一部の最後には、新宿区健康部副参事の白井淳子様よりご挨拶と共に、「慶應義塾大学病院が本気で地域連携強化に取り組んでいると感じた」との評価もいただきました。

第二部の懇親会は、レストラン「ザ・パーク」で開催いたしました。腫瘍センター長高石官均先生のご挨拶に続き、新宿区医師会長平澤精一先生にご来賓のご挨拶では、地域連携の更なる推進への期待をメッセージとしていただきました。乾杯のご発声は、訪問診療医として多くご支援をいただいている、ゆみのハートクリニックの弓野大先生よりいただき、歓談の場に移りました。今回は医師、看護師、社会福祉士、理学療法士等多職種の方総勢75名のご出席をいただきました。当院からは三村副病院長、松田事務局長、加藤看護部長の病院執行部、各診療部門医師、看護師長、事務職員の計94名が地域の皆様をお迎えしました。歓談の場では、地域でご支援いただいている患者さんの情報交換や地域包括ケア推進の重要性について活発に意見交換をする場となりました。中でも「医療・看護・介護コールセンター」の開設は、在宅療養を行う患者さんに関する問い合わせ窓口として大変心強いと、高い評価をいただきました。最後に松田事務局長よりご挨拶をいただき、無事会を終了いたしました。

今回も会場となりましたザ・パークからの多くの協力を得て、地域支援機関の皆様との交流を深める場として大盛況の会となりました。皆様のご協力に心より御礼申し上げます。

（副病院長
・医療連携推進部長
大家基嗣　66回）

医療チームの取り組み報告　藤澤大介先生

ザ・パークでの懇親会

## 「医学部新年祝賀式」および「坂口光洋記念慶應義塾医学振興基金に基づく慶應医学賞 ライジング・スター賞授賞式」の開催について（ご案内）

医学部長　天谷　雅行

医学部では毎年新春に教職員および三四会員による祝賀式を催しておりますが、この度、新年祝賀式を下記により開催することにいたしました。

新春早々ご多用のことと存じますが、ご都合をお繰り合わせのうえ、ご出席賜りますようご案内申し上げます。

なお、本祝賀式と併せ「坂口光洋記念慶應義塾医学振興基金に基づく慶應医学賞 ライジング・スター賞授賞式」を執り行います。

記

日　時　2020年1月6日（月）11時から13時30分
場　所　2号館11階　大会議室

## 慶應義塾大学病院　年末年始の休診

年末年始は、12月30日（月）より1月4日（土）の間休診となります。

病院長

## 慶應医学部新聞への投稿は以下メールアドレスまで!

〈新しいアドレス〉
**sansikai-editor@mediproduce.com**

アドレス帳の変更などをお願いします。

医学部新聞への投稿、ご意見、ご感想、近況などは上記アドレスまでお送りください。

## 鑑賞知来

キングス・カレッジ・ロンドン精神医学研究所に研究留学してもうすぐ4年になる。その間、英国の精神科専門医試験（MRCPsych）に合格し、専門医資格と医師免許を取得した。以降、統合失調症患者の脳内炎症に関するPET研究に従事する傍ら、統合失調症の専門外来で精神科医として働いている。

慶應で培った臨床医としての土台は海外でも十分通用するが、ことに精神科臨床においては言葉や文化の壁は大きい。特に、異文化への理解を考えるきっかけとなった印象的な出来事がある。

医師免許を取得してまだ間もない頃、イタリア人指導医の診察に陪席した時のことである。患者は精神病を抱える中東系の女性で、敬虔なイスラム教徒であった。ラマダンの時期で連日断食をし、体調を崩していた。断食の重要性を訴え、頑なに栄養補給を拒む患者に対し、指導医が「病人は断食をしなくて良いとアラーは説いていたでしょう。自分をいたわることが、神を愛することに繋がるのよ。」と諭した。他者の宗教に対する突っ込んだ指導に内心ヒヤヒヤしたが、それまで多くを語らなかった患者の夫が「先生、よく言ってくれました！」と感謝の気持ちを述べたことには驚いた。その時から、日本人としての常識にとらわれず、「地球人」として幅広い知識や価値観に触れることが重要であると感じるようになった。

研究で専門性を深めるために留学した自分が、4年目となった現在、思うこと。それは、臨床医としての幅をまだまだ広げる必要があるということだ。患者の治療を前進させるためには、もちろん一流の研究者を目指さなければならない。しかし同時に、臨床医としても一流でなければ、患者を幸せにすることはできないし、ともに研究する仲間からリスペクトされることもない。

自分のcomfort zoneを抜けて、足りないものを求めていくこと。それが、留学で得られている教訓だ。

（キングス・カレッジ・ロンドン精神医学研究所　水野裕也　86回）